

悲憤の日

1, 歴史は繰り返す

(1)その時が来てしまった

ついにと言うか来たるべきと言うか悲憤の時がやってきました。

60年安保の年に私は大学に入学し混乱した青春が始まりました。そして55年後の9月17日、体調を崩し伏せておりましたが、その瞬間はあの問題の多いNHKがTV中継していましたので多くの

国民と共に怒りとむなしさと悲しさを再び味わいました。数の暴力化は人間の血をも吸い取ってしまう冷酷さをもたらし、このような結果を生み出すことを学ばねばなりません。騒ぎを横目で睨みながら退出した安倍首相が印象的でした。

冷たい秋雨が降る中、立憲国家に危機を感じて力強いデモを全国でなさってくださいました人々に敬意を表します。

集った方々のエネルギーが将来に向かって国民主権を回復する健全な力になってくれることを願うばかりです。



(写真上) 鴻池委員長が席に着き、突然法案の決議に入ったことに抗議が始まる。8分間で可決された。

(写真左) 採決前に退席する安倍 首相

(2)若者が日本の資源

手続きさえ踏んでおけば何をしてもいいという形だけで行われた15日の中央公聴会で発言したシールズの中心メンバーの発言は多くの人には知らされていませんが率直で真摯です。私が入手できた限りで以下に紹介します。

「あの一、すいません、先ほどから、寝ている方がたくさんおられるので、もしよろしければ話を聞いて欲しい」と始まったという。議員はセレモニーが終わるのだけを待っている。寝ていても高額報酬は得られるのです。彼は続けました「私たち政治的無関心といわれてきた若い世代が動き始めているということです」「この国の未来について、主体的に一人一人、個人として考え、立ち上がっていったものです」「法案が強行採決されたら、全国各地でこれまで以上に声が上がり、――」「次の選挙にももちろん影響を与えるでしょう。私たちは政治家の方の発言や態度を忘れません。三連休を夾めば忘れるだなんて、国民をバカにしないでください」その場の雰囲気ややるせなさを感じたのでしょうか。然し聞き耳をなくした先生方には遠吠えの声にすぎませんでした。でも、頑張っただけいい。今の日本では若者の力だけが資源だから。

(3)最高裁判所はどう判決をくだすか

先ずはこの安全保障関連法が最高裁判所において違憲であるという判決をとる運動が始まると思いますが影響力のある健全なリーダーの出現を期待しています。来年の参議院議員選挙の動向に期待をする人が多いですが私には一つの恐怖があります。それは選挙前迄に安倍内閣の期待する事態が起こされるのではないかと言うことです。杞憂になることを願いますが独裁政権の怖さをどのような形で国民は体験するのでしょうか。自作自演だけは見たくありません。

(4)安倍発言の唯一の功績発言

国民を覚醒させたのは「ポツダム宣言を、つまびらかに学んでいない」という安倍首相の回答でした。あきれるだけでなく歴史ブームを再燃させました。私もその一人であって多くの時間をその学びに費やしています。今月は日清戦争を記てあります。明治初期の「超然内閣」を知ることができます。その意味で安倍首相は歴史を学んでいるかも知れません。

(5)良い質問が良い答えを引き出す

今回の過程で最も残念であったのは野党議員の質問の浅さと根気無さ詰めの甘さの故に核心にふれる回答を引き出せずに終わったことです。質問者にも後味の悪さだ

けが残ったのではないのでしょうか？「良い質問が良い回答を引き出す」という普遍的な法則を忘れて相手の狡猾な土俵に引き込まれるだけで、質疑の連続性が中断され、国民が理解出来る回答が引き出せなかったことに腹立たしさを感じます。今のままでは参議院議員選挙に勝てる保障はありません。数の多寡にこだわらず優秀なリーダーの排出を妨げず国民主権の立憲国家を再建して頂きたいと祈る者です。

2, マイナンバー制と消費税還付

(1)管理手法

優れたコンビニでは単品管理が徹底しています。バーコードが全ての商品に貼り付けられています。私たちの日常生活に便利になじんでいるものです。

国民に背番号をつけて徴税管理する方法も古くからありました。近年の日本では2006年の住民基本台帳法に基づくものでしたが普及しませんでした。私は当時は職業上の理由で率先して登録しカードを発行してもらいました。運転免許を持たない私には今では唯一の身分証明書になっています。

(2)為政者にとって人は者でなく物なのか？

マイナンバー制をどのように普及させるのか興味を持っていましたが財務省案が先日公表され物議を醸し出しています。国民主権・基本的人権を崩壊しようとしている安倍政権の関係者は国会議員のみならず官僚も戦前の上から目線を当たり前に行使し始めて「税金をまけて（還付）欲しかったら速やかにマイナンバー制に服しなさい」と言ってきました。関係大臣の言葉も粗野で記録するのが不愉快です。獣化しています。

官僚思考の特徴は単純なことを複雑に考えて支配者意識を満悦する傾向にあります。食品の消費税を据え置きにするのは実に単純なことで消費者の喜びも灰色の庁舎にその声が届くと思うのですが感情より勘定が常に優先する精神的雰囲気は伝統的になっているのでしょう。この制度はまだ決定していませんが官僚や政治家の内幕を少し知ることができました。

(3)完成近い管理社会

書物からの部分抜粋、特に聖書からの抜粋は慎重にならなければならないことを教えられていますが今回は敢えて部分抜粋をします。ヨハネ黙示録（2000年前の黙示文学）は聖書の最後にあります。その13章15節には次のような文章があります。

「第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。

また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。

そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。

ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である」（共同訳）

獣の像とは当時のローマ帝国と解しています。この書は黙示文学で非常に難解なものです。書かれた目的を知ると簡単に読めます。初期のキリスト者への国家の迫害に堪えて「礼拝」を守り忍耐して神の国を待ち望むという希望メッセージです。

又、マイナンバーがなければ医療も年金も私的な預金も受けられない日本になることだけは確かです。マイナンバーの中には信仰も心情も趣味も体型も能力も書き込まれる日がくるでしょう。管理社会が完成します。これはもう避けられません。

便利を極限にまで追求したコンピューターを発達させたのは人間です。その始まりが軍事であったことも忘れてはなりません。だからこそ誰がこの国の支配者になるかに大きな関心を持たねばならないと私は考えています。だからこそ支配者の暴走をさせない憲法が必要です。

(4)国民の賢さだけが砦

憲法問題が新たな段階に入りました。歴史をよく学び、智慧と賢明さが政治に反映されるような選挙制度の変更、政党交付金の問題、人口減少社会に適した議員数等手の届く問題は沢山あると思います。最も問われるのは政治家の資質です。国民による評価制度を導入すると国民も政治に関心と監視を始めると思います。今の政治家は党の綱領に忠誠を誓い、国民には選挙の時だけ見せかけのへりくだり姿勢を示しているようです。選挙制度に変更と議員の数の減少を国民の権利によってできる方法はないものなのか？総理大臣を国民が直接選べないのか？18歳の意見も聞く仕組みを必要です。最後の砦は賢い国民投票と言って来ましたがその権利行使されれば困ると判断したのが現政権です。民主主義国家を標榜してきた日本から再び独裁的な政治家が出現するその仕組みを今回は学びました。

そして結論は「選んだのは国民」と言われてしまいました。愁嘆の極みです。

常識の歴史を学ぶ

日清戦争基礎入門

私は太平洋戦争の始まった1941年8月に生を受けました。

敗戦後70年の節目を意識して、昭和史を見ていると何気なくその頃の大日本帝国の領土地図に目がとまり、改めてその領土の大きさに驚きました。改めてとは高校時代の知識を忘れていたからです。

何故こんな広域に日本は領土を拡げることができたのかという疑問をもって高校歴史教科書「日本史B」準拠の参考書を読み始めました。

既に2009年に加藤陽子さんが高校生と対談した「それでも日本人は戦争を選んだ」がありますが、この名著を理解する必要がある知識をまとめることにしました。本稿の水準は高校の「日本史B」ですが、理解を深める為に詳しくする必要があるところは「資料編」を新設して掲げます。本文との重複もありますがかなり掘り下げてあります。

前回までの復習

前回は江華島事件を起こし日朝修好条規を結ばせて朝鮮進出の手がかりを付けたところまでを記しました。この条約締結の際全権特使黒田清隆は6隻の艦隊を率いて、その軍事力を背景に、賠償金の支払か、開国かの二者択一を迫り開国をさせた。これは1853年に日本がアメリカから受けた不平等条約を押し付けた内容になっています。

江華島事件は1875年のことで今から140年前です。1945年を挟んで70年です隣国との関係が今も平和裡に解決していないのは何故か？領土拡大で失ったものが大きいことを率直に学び直します

さて、今回は日清戦争による領土の拡大がテーマですが開戦に至るまでに播かれた原因を先ず見ていきます

1，日清戦争前夜

(1)日本国内の事情

①1881年伊藤博文（長州藩）が明治14年の政変で大隈重信を失脚させます。その代償のような形で「国会開設の勅諭」を出して9年後の1890年に国会を開設すると約束します。

②この間、沢山の政党が産声を挙げ結合したり分離したりするわけですが（このところは試験にでますが、ここでは割愛します）1882年伊藤博文は薩長藩閥主導の立憲政治を樹立するためにウィーンにシュタイン教授を訪ね憲法理論を学びに行きます。

③1889年山県有朋（長州藩・内務大臣・陸軍に山縣閥をつくる）がウィーンにシュタイン教授を尋ね、今度は国防と軍事を教わり、「主権の及ぶ国土の範囲を『主権戦』といい、その国土の存続に係る外国の状態を『利益線』と呼ぶことを学んで帰国しました。（シュタイン教授は朝鮮を中立国にすることが日本の利益線になると答えた）

④1890年第一回帝国議会が招集されますが内閣総理大臣は山県有朋です。議会は

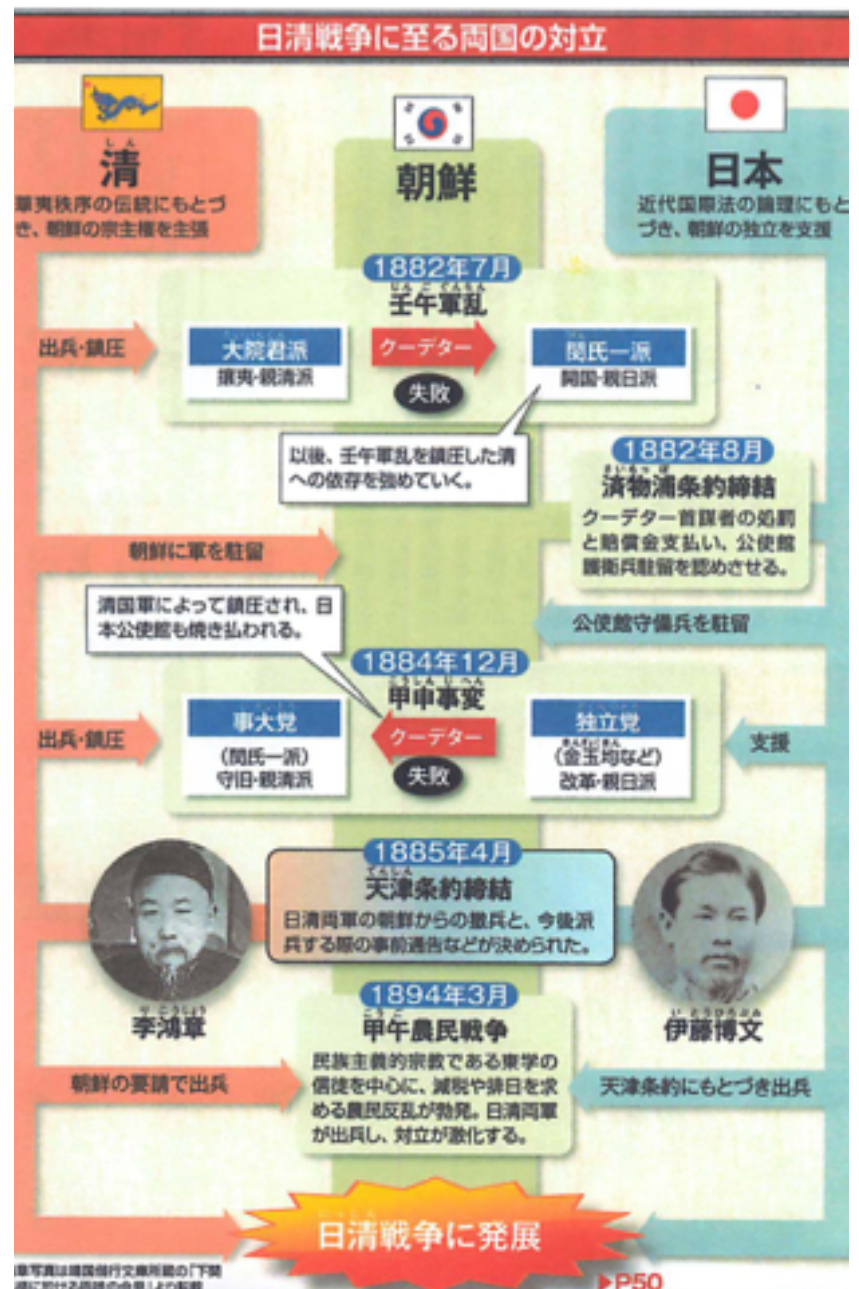
今風の言い方にしますと与党129、野党171とねじれ国会です。まだ藩閥内閣ですから少数与党が政策を実行するには多数決は困るわけで、山県有朋は「政党の意思に左右されない超然主義」の立場に立って、朝鮮を利益線とする大演説をして大幅な軍備拡張予算を提出しました。国防の立場から朝鮮を味方に付けることの重大さを訴えたのです。山県有朋の内心は分かりませんが、どういう形で味方にするかはこれからの歴史が証明していきます。

⑤軍備拡張予算は初期議会では難航しますが日清戦争が始まる頃から一致して、軍拡予算の成立が続きます。

(2)朝鮮と日本の関係が悪化する事件が続発します。

日清戦争に至る図説を掲げます。（図解近代史成美堂出版p46から引用）

①1882年壬午事変（詳細は粗稿343-1参照）



国王高宗の父である大院君によるクーデターです。大院君は冊封体制を維持して清国以外とは開国しない立場をとりますが、高宗の妻である閔妃は開国派で日本に教えを請っている。それが気に入らないというので大院君は守旧派を集めて日本の公使館に放火し日本からの軍事顧問を殺害しました。

この事変を鎮圧したのは清国で、事変が終息しても袁世凱は3000名の兵を引き上げず、朝鮮国の内政外政に干渉して冊封関係を強化して「近代的な属国」にしようとした

この事件の結末は日本は済物浦条約を締結して日本公使館の修復をし、その警護のために日本警備隊一箇大隊を置くことを認めさせた。結果日清両国の軍隊が朝鮮に駐留することになった。

(ここがポイント)

日本はこの年から「軍拡8カ年計画」に入る（粗稿343-5 参照）

②1884年甲申事変（詳細は粗稿343-2 参照）

朝鮮で起きた開国派が起こしたクーデターです。朝鮮を近代立憲君主国にしようとした人たちが日本に留学に来て福沢諭吉、後藤象二郎らに学んでいた。クーデターの知らせを閔妃が清国に密使を送り救出を袁世凱に依頼したので1500人の兵が王宮に入り150名の日本軍と戦ったが不利な日本軍は公使館に火を放ち長崎へ敗走した。

結果は天津条約の締結となり伊藤博文と李鴻章の会談で、今後再び

両国が朝鮮に派兵する場合は共に事前通告をするという、**将来の朝鮮出兵を前提とした取り決めであった**。1885年には福沢諭吉の脱亜論が発表された。

③1889年朝鮮防穀令に日本が損害賠償を求める。

朝鮮では不作が続き生活に困窮した民乱が頻発、1885年から1891年迄13回、1892年は8回、1893年は11回も発生している。

農村では飢饉が起こり餓死者が多くなり、日本への輸出を禁止する防穀令がだされます。防穀令は一ヶ月前に通告されるべきであるとされていたがそれが守られず、日本の商社が損害を被ったといって日本政府を動かして賠償を要求した。

この仲介をしたのが清国の李鴻章であった。この時点では清国と日本は対ロシアのアジア進出を防ぐという共通の目的があった。

④朝鮮の国内状況

為政者が官僚機構、税制を私物化、官職の売買での賄賂が日常化等、極度に政治が腐敗して、地方の役人が官職を得て管轄住民から過酷な税を収奪していたので、飢饉と収奪で民衆の不満は政府にも及んで、東学党の乱が勃発する素地は当

然のようにできていた。

(3)列強から狙われた清国と朝鮮

- ①1885年、朝鮮では清国の内政干渉が過激になってきたので国王と閔妃はロシアに接近して、朝露密約を結ぶ。ロシアは南下して不凍港を確保したいと巨文島の割譲を狙っていた。
- ②そのことを察したイギリスが機先を制して**巨文島（地図参照）**を占領し、清国はこれを承認した
- ③1884年フランスに北ベトナムの植民地を認めていたのに続いて1887年カンボジアと南ベトナムを合わせて仏領インドシナとすることを認めさせた。
- ④1891年ロシアはシベリア横断鉄道敷設計画に着手、アジア側の起点はウラジオストクである。朝鮮に隣接するが冬期は港が凍結するので不凍港の元山を狙う。
- ⑤結果は後述の通り両国国民に不幸をもたらした。



2，日清戦争の開戦

(1)1894年2月、甲午農民戦争（東学党の乱）が起きる

- ①朝鮮南端の全羅道で群守の虐政にたして農民が蜂起した（詳細は粗稿343-3参照）
- ②反乱がピークになった6月、朝鮮政府は清国に農民鎮圧のため軍の出兵を要請した。
- ③1884年の天津条約により清国は日本に出兵の旨を知らせ、日本軍も直ちに出兵を知らせて素早く動いた。この素早さは先を読んだものと解せられる。
- ④ところが両国の干渉を嫌い政府と農民は自力で全州和約を交わし農民の自治を認めた。
- ⑤日本はこの際、清国と共同で腐敗した朝鮮国の内政改革を提案するも清国は必要

を認めなかった。

- ⑥清国は共同撤兵を主張したが日本軍はそれを拒否したために両国の軍隊は撤退をせず、6月10日から約一ヶ月間一定の距離を保って対峙することになった。

(2)日本の言い分、清国の言い分

- ①江華島事件後の日朝修好条規によって朝鮮は清国から独立しているのだから、冊封関係（宗属関係）の破棄をするように回答期限7月22日とする最後通牒を朝鮮政府に出した。
- ②清国は朝鮮を独立国と認めている日本が内政干渉をするのはおかしいと非難した。
- ③この言い分争いは清国側の論理が通っているが日本軍には引き返せない理由があった。
- ④外務卿陸奥宗光から大鳥圭介公使に「どんな口実を使っても、どんな工作をしても戦争に持ち込め」との命令があった（詳細は粗稿343-4, 6, 8参照）

(3)日本は漢城（ソウル）の朝鮮王宮襲撃する。

- ①期限迄の回答がなかったことを理由にして7月23日王宮を包囲して朝鮮軍を武装解除する。
- ②朝鮮の国王・高宗に対して父の大院君を国政の総裁とするように強要し、大院君と対立していた閔妃・閔氏派閥を打倒し、傀儡政権を造る。
「朝鮮政府が日本に牙山にいる清国軍の撤退を依頼した」という
「委任状体の書面を書かせた。」
- ③大院君は7月25日、清国との冊封関係の解消を宣言した。日本軍の偵察が開始される。
- ④清国は駐屯軍を増派、天津近くの塘沽港から朝鮮の牙山海岸に向けて食糧・軍馬・弾薬等を積載した船を出していた。
日本政府は19日に「この際、清国より増兵するにおいては、日本はこれを威嚇の処置とみなす（開戦するとの意味）」との覚書を回答期限7月24日と定めて清国に通告していた。回答がなかったので25日より偵察隊が始動した

(4)7月25日開戦、豊島沖海戦

問題になったのは清国が戦争準備行為として、天津近くの塘沽港から朝鮮の仁川に清国駐屯軍1,100人と食糧、武器等を積載していた「高陞号」であった。マストにイギリス国旗を掲げ、船長はイギリス人、船籍はロンドン所在のインドシナ汽船会社の代理店が所有であったが、清国政府に雇用されていた。

英国船員に向かって「艦を捨てよ」と度々信号を送ったが応じなかったので水雷で撃沈させた。イギリス人の船長以下3名は日本側が救助、清国の陸軍兵の内200 余名は翌日英・仏・独の軍艦が救助した。

(5)開戦詔勅前から戦いは始まっていた。

日清戦争の開戦の過程は地図で示す通りですが8月1日の開戦の詔勅前から始まっていた。

7月29日の成歓の戦いは最初の陸戦である。目的は清国軍を朝鮮から撤退させることであつた。

(6)1894年8月1日・開戦の詔勅（天皇の言葉）の要約

「日本は、朝鮮がその内政を改革し、また独立国として体面をたもてるように指導してきたところであり、朝鮮もそうした日本の指導に服しているにもかかわらず、清国は朝鮮の改革の努力を妨害するのみならず、水陸の兵を備えて、折あらば朝鮮征服の野望をとげんとしている。そして大兵力を朝鮮に進め、また我が艦隊を襲撃するなど横暴を極めている」「ことは既に、ここまできてしまった。余は、平和であることに終始しそれをもって、帝国の栄光を国内外にはっきりと顕現させることに専念しているのであるけれど、その一方で、公式に宣戦布告せざるをえない。汝ら、国民の忠実さと勇武さに寄り頼み、速やかに、この戦争に勝って、以前と同じ平和を恒久的に取り戻し、帝国の栄光を全うすることを決意する」

原文の全文を資料として粗稿 3 4 3-7 参照

私見

真に歯切れの悪い詔勅です。。開戦に最も批判的であつたのは明治天皇と言われており「今度の戦争は大臣の戦争であつて、余の戦争ではない」との趣旨の記録が残されています。大臣とは伊藤博文首相に対立していた外務大臣陸奥宗光のことです。天皇といえども戦争を中止できない状況が作り出される事実は組織の中に吹く風の恐ろしさです。多数の不本意にもかかわらず誰も止められない今の日本にも当てはまります。結果に誰も責任を果たしません。ここを一番学ばなければならないところと私は考えます。

(7)1894年8月5日、大本營が参謀本部から宮中に移動した。

日本はこの戦争で参謀本部（陸軍の最高組織）の中に大本營（陸軍および海軍を支配下に置く戦時中のみの**天皇**直属の最高統帥機関）を6月5日においたが、9月13日には戦争指導のため戦場に近い広島に移動した。

(8)9月15日～16日平壤の戦い

この戦いで本格的な陸戦が始まり、清国軍が朝鮮から駆逐された。

翌17日黄海海戦で清国が誇る北洋艦隊を破り日本が制海権を握った。

この段階で開戦の詔勅で言われていた目的は達成していたが外務大臣陸奥宗光は

「外国からの干渉余り面倒ならざる以前に、どの地方でもいいから出来るだけ広範囲に占領するように命令していた。

開戦
目的達成

(9)講和打診を拒否

1894年10月6日「日本が十分に勝利を得るときは、清国の未来に恐るべき結果生ずべし」とロンドンの「エコノミスト」が警告した。英国は独仏伊露米の5カ国は連合して講和打診をしたが日本は要求を拡大してこれを拒否した。

東学党が再蜂起をしたが日本軍が鎮圧して存在感を示したばかりでなく11月6日には**旅順大虐殺**を行っている（詳細は粗稿343-9参照）。



3 戦場が清国へ・戦争目的の変更

(1)アメリカからの講和打診も拒否

- ①10月24日日本の第一軍が鴨緑江を渡り清国領内に進攻開始、九連城を攻略
どんどん内陸部へ進攻をした。
- ②11月7日、日本の第二軍は遼東半島上陸を開始する。11月21日旅順虐殺事件
を起こす。（詳細は資料編）
- ③目的を大きく逸脱する日本軍に対して、11月5日アメリカ国務次官が駐米日
本大使に調停の意思を表明するも、陸奥宗光外務大臣から「遼東半島の割譲を要
求すべき」との内容を伝えられていたので提案を拒否。その後1894年12月から
95年2月にかけての仲介も拒否した。

(2)戦争の目的の変更

- ①陸奥宗光は山東半島の威海衛、澎湖島、台湾を略すべきと考えて意見書を大本
営に提出している。この意味するところは朝鮮だけでなく清国の領土も広い範
囲を獲得したいがまだ占領出来ていないので講和に臨めないということ。
- ②日本国内世論は新聞にあおられ熱狂し「将来の欲望日々に増長」し、講和の条
件が拡大の一途をたどる。
- ③1895年1月31日、英露両国公使が陸奥外相に会見、講和の条件を質問してきた
答えを知った露英仏三国は共同して「中国大陸の寸土をも日本の領土とすること
を許さない計画である」と決定。このことを2月7日「タイムズ」がスクープ。
日本に火を付けることになる
- ④2月中旬、山東半島を占拠、制海権を完全に掌握した。
- ⑤3月上旬、遼東半島全域を占領した。

4， 講和条約の調印と戦いの続行

(1)講和に向かった交渉

- ①3月19日清国講和全権・李鴻章が門司に到着
翌日から下関で交渉開始。日本側は休戦の条件として天津の占領も計画中、
まだ占領していない天津は北京に近く日本の支配欲は広がるばかり。
休戦期間中の軍費の清国側負担など過酷な条件を付加している。
- ②3月24日李鴻章が暴漢に狙撃される。この事件で日本は弱みができ、列強の非
難・干渉を憂慮して講和を急いだ。
同日アメリカ国務次官は駐米日本公使に
「ロシアの野心は異常に大、中国北部と満州を占領しようと欲し、日本が同地域
を占領し朝鮮を保護国にすることに反対している。ロシア軍3万が中国北部に

ありなお増加中」との情報をもたらした。

③占領目的を台湾に拡大する

この作戦は前年よりあったが着手されていなかったが台湾獲得のために
3月26日澎湖列島を占領、台湾の進攻への足がかりを造った。

③3月30日、澎湖島、台湾を除外する日清休戦条約の調印

④4月4日、李鴻章は長文の覚書を伊藤博文に送った。その概要は次の通り

「清国領土の割譲は清国民の対日復讐心をたかめ、将来の日清協力を困難にする。
日清両国の紛争は、列強の侵略を誘起するのみ。日本は講和条件を緩和すべき」

日本は若干の譲歩をする（天津の占領を譲歩？）も三国干渉を折り込み済みの内容で講和に臨む

⑤4月17日、日清講和条約を調印（発効は5月8日）

澎湖島は占領済、然し、台湾には進攻していない。台湾への攻撃は5月29日である。

私見

朝鮮への派兵は、どこからも依頼されていない。天津条約によって、「清国と日本のいずれかが朝鮮に派兵するときは互いに通告する」との約束で出兵したが東学党の乱がおさまって両国が撤退するべきであったが日本側には撤退できない国内事情があった。（詳細は資料）「どんな理由をつけても戦争に持ち込め」の指令で戦争を継続する大義名分が必要になり、武力を背景に大義を造り戦場を朝鮮のみならず清国内へと向ける。これは開戦の詔勅に違反することであるが国内からは反論は出ていない。地上戦は人と人との殺し合いゆえに残虐さは増すばかりである。旅順の大虐殺は清国兵の残忍さに対する復讐であるといって民間人まで殺害している。南京虐殺は問題になるがその前の旅順虐殺は忘れられているか抹殺されている。個々の人間性の持つ残忍さを学ばねばならない。組織に勢いがついてしまうとトップのリーダーシップが機能しなくなることも法則的確率で発生することもこの戦争は示している。そして、人間は平和を願いながら戦争を止めない。資料として添付する「開戦の詔勅・口語版」は端的にこれらの矛盾を明らかにしていると思いますまた、この戦争を「第一次朝鮮戦争」と位置づけられているのが、原 朗（はら あきら）氏の著書が平易で参考になります。NHK出版新書「日清・日露戦争をどうみるか」の中で「ある戦争の本質は、その戦争の帰結としての講和条約にもっとも明確に示されています」とあります。その観点から下関条約を考えていきます。

(2)下関講和条約の内容

1895年4月17日調印された下関講和条約（日清講和条約）の要旨は次の通り。



- ① 朝鮮国の完全無欠な自主独立の承認
- ② 遼東半島、台湾、澎湖列島の割譲（開戦詔勅には無かった）
- ③ 軍事賠償金平銀2億両（邦貨約3億円）
- ④ 清国と欧州各国間条約を基礎として日清通商航海条約および陸路交通貿易に関する約定を締結、その実施まで日本国に最恵国待遇（資本輸出権の承認）
- ⑤ 新たに日本に沙市、重慶、蘇州、杭州を開市、開港
- ⑥ 宜昌・重慶間および上海・蘇州、杭州間汽船航路を承認
- ⑦ 開港場における各種製造業従事権の承認、内国運送税、内地賦課金、取立金についての特権
- ⑧ 批准後3ヶ月以内に日本軍は撤退、条約を誠実に履行することの担保としての威海衛占領

。

(3)下関講和条約の評価

- ①日本の宣戦の詔勅に述べられた戦争の目的に合致しているのは(2)の①と③のみである。目的と結果の乖離が甚だしい。
- ②しかも賠償金約3億円は日本が要した戦費2億円を大幅に上回るものである。

三国干渉で遼東半島返還となるがその返還費用は6,000万円が追加となる。

清国の賠償能力をはるかに超えたものである。

- ③列強国が(2)の②に対しては三国干渉をしてくるがその他の過大な日本の要求に干渉しなかったのは(2)の④により今まで自分の力では実現できなかった資本輸出権が認められるという大きな特典を得たからである。

即ち最恵国待遇（最も恵まれた国と同じ権利を獲得することができる）の適用を受けることになった。既に清国となんらかの条約を結んでいる国は、この日本の新しい条約と同じ権利を獲得することができた。清国内に外国資本の会社の設立が可能となった。列強は以前から狙っていたものを日本がプレゼントした。

私見

原 朗氏の「ある戦争の本質は、その戦争の帰結としての講和条約にもっとも明確に示されています」（「日清・日露戦争をどう見るか」p59）の記述に私も賛同しています。開戦から日本には隠された目的があったということです。私がよく用いる裏面交流で最後には必ず隠された目的が明らかになるのです。特に(2)–②はロシアが受け入れることは絶対にないことが分かっているにもかかわらず（あえて）入れています。三国干渉は計算の内であり、日本国民の感情をある方向に誘導していく手段に用いられています。三国干渉程度で終わっているところに列強にも隠された利害関係、最恵国待遇があったと考えます。

5，折り込み済みであった三国干渉

(1)三国の干渉内容

4月23日、露独仏公使が外務省を訪れ「日本の遼東半島占領は、清国の首都を危うくし、朝鮮国の独立を有名無実とし、極東の平和に障害をあたえる」との理由で放棄を勧告してきた。

- ①ロシアは満州への進出と南下して不凍港の獲得（朝鮮の元山）を狙っていた。

日本の勢力が過大になることは自国には将来的に利益線の確保上不利になる。

- ②独・仏は日本の取り分が多すぎる。このままだと清国の領土分割戦争が始まる危険性がある。

- ③三国干渉は条約締結の前から自明のことであった。日本がこの戦争目的を達してからは度重なる列強から講和への提案があったが、ことごとく拒否してきた。

日本側は国内向けの説得をするために一旦条約にいられておいて「勝利」の内容を知らしめ、後に干渉され取られたというストーリーが必要であったと考えます。

日露戦争への準備が国民感情レベルで醸成されていきます。

(2)三国干渉は軍事的危機であった。

三国干渉に臨みロシアは日本と戦う準備をしていた。

1894年末以来、ロシア政府は、ウラジオストクに、その極東での海軍力を集中させ、陸軍の一部も展開させていた。1895年3月にはロシア海軍がその地中海艦隊を極東に派遣した。（日露戦争に類似しています）4月には、ロシア陸軍は、満州への侵入を準備するため、その陸上戦力を極東に移動し始めていた。下関講和条約批准時には、ロシアは太平洋に30隻の軍艦を浮かべていた。その時には日本軍は全師団が戦場にあり、国土防衛はできない状況であった。

この状況は国内の過激派・戦争続行強硬派も戦争続行は無理と納得したようである。三国干渉を西洋に敗北したような本も多いですが、日本は折り込みずみのしたたかな交渉をしてその要求は受入れ他の多くの要求を承認させたと言わべきです。

(3)遼東半島の返還

①1895年5月4日、伊藤内閣は遼東半島の返還を閣議決定して翌日三国へ返還の旨を伝える

②1895年11月8日、清国と遼東還付条約を締結、返還金は3,000万両とした。

③これで清国は日本に対して2億3000万両（約3億6千万円）を受けることになった。その内62.8%は日露戦争の準備に用いた。



(4)イギリスは何故干渉に参加しなかったか

①1840年のアヘン戦争でイギリスには清国に10箇所以上の町や島を占領していたが、領土割譲させたのは香港島だけであった。

②1844年アロー戦争でも領土割譲させたのは九龍半島南部だけであった。

- ③このことから分かることはイギリスの戦争目的は貿易上の利益の確保であってその外交手段の圧力とするための占領に留め、広い面積を狙っていない。
植民地経営は面倒であるから積極的にしないという合理的な判断をしている。
- ④イギリスはロシアのアジア進出が一番の脅威であると考えており、その為に必要な拠点の確保とそれを守ってくれ国がロシアと戦ってくれることを欲していた。この戦争で日本の強さを認識し日本に近づき見えない協力をしていた。どこの国であれ南下するロシアの防御壁となる国を応援する政策である。
- ⑤このように考えると日清戦争開戦直前の四日前に日英通商航海条約の調印の意味が理解できる。この考えが発展して1902年の日英同盟が結ばれるのも理解がしやすくなる。深読みになるかも知れないが貿易上必要な拠点を押さえていたイギリスは日本・朝鮮・清国を植民地化するのでなく各国の中立化を欲していたと考えられる。

6， 下関講和条約の各国への影響

(1)日本への影響

- ①列強との対等性の確保、不平等条約改正の撤回、真の独立国となり、国民の自負心が芽生え、傲慢さと勢いが列強に脅威を与えた。
- ②多額の賠償金で軍需産業を中心に経済が発展、インフラの整備ができた。
獲得した賠償金は2億3000万両（邦貨換算で3億6000万円遼東半島の返還金を含む）と多額であった。後に分かることであるがその6割は日露戦争の準備に使用された。
当時の国家予算は約7000万位であった。
- ③はじめての大本営を設けて宮中から広島に移転する等天皇が直接戦闘指揮をとった形を造った。天皇はこの戦争に反対であったにも拘わらず政治家が出来たての大日本帝国憲法の解釈により天皇を巻き込んだ軍事国家の体制ができあがった。天皇の還幸は 1895年5月30日で台湾戦争以前は指揮をとった形となっている
- ④開戦の詔勅によって国際的に宣言した目的は果たせなかった。
即ち朝鮮国の近代化は果たせず、朝鮮国は戦場となり民衆は極度の被害を被り日本の支配を恐れロシアに接近した。反日感情が更に高揚した。
- ⑤開戦前に対立していた政府と民党がこの戦争で目的に向かって一致した。
戦後の予算編成に軍備費の増加を抑制する歯止めがなくなった。

(2)清国への影響

賠償金は2億両と遼東半島の買い戻し3000万両の合計2億3000万両は
当時の国家財政収入は8900万両であったから2,6倍の法外の高さであった。

この資金は全額外国からの借款によらねばならず、借款には担保が必要であった
複雑になるので先ず借款を、次に担保（租借・割譲）の順番に記します

借款

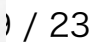
- ①1895年7月6日、フランスから2,5億フラン、ロシアから1,5億フラン
年利4% 36年返済
- ②1895年3月7日、イギリスとドイツから1,600ポンド、年利5%、36年返済
①と②で2億両調達したがリベート、謝礼、官僚の汚職、浪費、流用で残った
金額は1億5700万両で日本への支払には7300万両不足することになった。
- ③この追加融資についてはイギリスとロシアの激しい競争があったが、清国の決
断でイギリスからの民間融資という形をとって1,600ポンド（約1億円）融資
- ④1895年12月、フランスとロシアは600万ルーブルを共同出資して、露清道勝銀
行（本店サンクトペテルブルグ）を創設し翌年清国も500万両出資する。
支店は上海、北京、天津、経営権は清国に無し

借款の担保・租借

- ①1896年6月3日 清露密約
ロシアのシベリア鉄道他に中国東北部（満州）の領内を貫通させウラジオス
トクまでの東清鉄道敷設の権益。日本に対する相互防衛援助を目的とする。
- ②1897年11月ドイツは膠州湾を占領、翌年租借条約締結、期間99年
膠州から済南まで鉄道敷設、鉱山開発
（これは第一次世界大戦後日本のものになる）
- ③1897年12月ロシアによる旅順・大連の占拠、翌年租借条約締結、期間25年
ロシアは武力行使をして三国干渉で日本に戻させた地域を手中に収めた。
三国干渉がロシアの主導であることが明らかになる。
- ④1898年4月、フランスによる清国南方権益要求、
翌年11月広州湾租借条約締結、期間99年
ベトナムに隣接する3省をフランス以外の国に割譲してはならない。
ベトナムから昆明までのフランスによる鉄道敷設
- ⑤1898年4月、イギリスによる威海衛の租借

私

見



下関講和条約は平和を実現するものではなく次の戦争への準備であった。

日清戦争中イギリス・アメリカからの講和仲介を拒否し宣戦詔勅に違反して、天皇の意思に反して領土拡大に向けた戦争に変えたのは陸奥宗光外務大臣のリーダーシップであった。

宣戦詔勅　清国が朝鮮を独立国として認めず属国扱いし、さらには朝鮮の国政の安定に必要な内政改革も拒否していることが東洋の平和に反しているので清国に宣戦布告するとなっていた。

1894年10月6日には日本の勢いに驚いたロンドンの「エコノミスト」は「日本が十分に勝利を得るときは、清国の未来に恐るべき結果生ずべし」と予告されていた。

1895年4月4日の李鴻章が伊藤博文に送った長文の覚書も現実のものとなった。

「清国領土の割譲は清国民の対日復讐心をたかめ、将来の日清協力を困難にする。

日清両国の紛争は、列強の侵略を誘起するのみ。日本は講和条件を緩和すべき」

人間が原罪として持つ本性は自己中心性であるから、他人の助言を聞き入れると言うことは本質的に不可能なことかも知れない。明白な結果が示されていても軌道修正はしないのが本性かも知れない。

人間の社会性の一つに、二つのグループができると必ず競争の原理が働くと言われている。この戦争は伊藤博文首相と陸奥宗光外務大臣の水面下の争いがみられ重大局面では陸奥が制している。勝利した戦争ということで誰も責任を問われていないが近代国家日本の進路はこの戦争の時に敷かれていると思われ陸奥宗光外務大臣の長期展望の誤りは隠せないと思う。個人的な反対が組織決定には逆らえない。陸奥は天皇より大きな権限を持っていたことになる。

この戦争では軍隊があり、徴兵制があったが主導的に指揮をとったのは、軍人ではなく政治家であった。好戦的な政治家が未だ力がついていなかった軍を思うように指揮をしたのがこの戦争の特徴の一つである。

領土拡大の視点から見るとこの戦争で台湾をとったことで琉球も日本の領土と確定したといえる。

7、台湾征服戦争と植民地化

(1)台湾を占領する

①1894年8月5日大本営が宮中に移動した頃から台湾へ進攻を計画していた。

実際に「威海衛を攻略した後に台湾を占領する」と伊藤博文首相が明らかにしたのは12月4日であった。これは11月から講和交渉が始まり出して慌て発表したようである

②1895年2月1日広島で清国と講和会議が持たれたが日本側は清国側の委任状が不

備であることを理由に拒否した。この段階では台湾への行動は取られていない。

- ③大本営は、2月13日威海衛の北洋水師降伏の報を受け、台湾攻略戦の前提として、澎湖列島（p15地図参照）攻略作戦計画を策定する。3月16日戦闘開始した。講和の正式交渉開始までに台湾島占領の既成事実を作って清国へ台湾獲得要求の必要条件を強引にでも進める必要があった。（日露戦争でもこの戦術がある）
- ④3月30日、日清休戦条約の調印
- ⑤4月17日、日清講和条約の調印（発効は5月8日）台湾割譲が承認された。

- ⑥台湾北部への進攻は5月29日である。講和をしながらも、又その後にも戦争が継続する。

台湾占領は開戦の目的にはなかった。戦争を続行中に方針が変わり戦場が清国内にも拡大した。

更に講和条約には台湾の割譲が入っているが、占領されていない台湾の人々にとっては全く理解できないことである。

(2)台湾平定の戦い

「台湾に赴いた日本部隊は台湾人の抵抗に合い、現実には台湾を受領するためには、征討を行うほかはないことになった」（旧参謀本部）

この戦いには台湾出兵（1875年）の経験者が多く派遣されている。

①台湾の抵抗と北部討伐 軍政の施行

1895年5月29日日本軍、台湾北部に上陸

5月23日、清国政府帰還命令に応じず残留していた僅かの清国文部官と台湾住民による「台湾民主国」宣言が行われたが列強からの承認が得られず崩壊、日本軍との戦闘の末、首謀者が清国に脱出した。

日本軍は6月17日日本帝国の領土となったことを宣言する。

8月6日台湾総督府条例を作り軍政を施行

②台湾の抵抗と中部討伐

樺山総督率いる混成旅団が8月17日から中部鎮定を開始、28日目的を達するもマラリア・赤痢・脚気等により兵站病院に収容された病人は4,274人となり戦闘能力が落ちる

③台湾の抵抗と南部討伐

9月29日から南進を再開、兵站（へいたん・兵器・食糧・医療等の後方補填、旧陸軍では輜重・しちょう）に苦しみながら11月18日平定の宣言を発した。

④台湾全島平定宣

台湾平定のため派遣された軍隊は76,000人、戦死者453人、戦病者10,236名、負傷者514名、殺害した清国人は兵士と住民合わせて14,000人。先陣をきって台湾に進攻した北白川宮師団長はマラリアに罹り台南城で死亡した。

海外からは無用の戦いとの批判があった。

初代、台湾総督は樺山軍令部長であった。

このようにして日本は台湾を植民地として太平洋戦争敗戦まで支配した。

私見

外交交渉とは一種の秘密交渉である。どんな場合も全てが公表されることはない。交渉の「場」の精神的雰囲気が大きく左右する。従って個人の感情と意見が入り込み個人が組織を利用することができる。組織とは誰も責任を果たさない集団である。組織とは責任転嫁の歯車の寄せ集めである。

下関講和条約の前にあった李鴻章の狙撃事件で日本は交渉を急ぎ、要求内容を緩和したとあるが、恐らく天津の占領を放棄したと考えられる。その代わり台湾を交渉に入れたと考えられないだろうか。清国は少し前までは「あそこは野蛮人が住んでいるから云々」と発言していたから清国にとってもこの時期には余り重要ではなかった。日本にとっては南進の要になる重要地である。三国干渉にも台湾は問題にされていない。このあたりの駆け引きは想像もできないところである。

8、戦争はまだ終わらなかった

(1)日清戦争の目的は朝鮮国の完全な独立であった

下関講和条約の第一条に記されている。この条項によって朝鮮国は正式に独立国となった。朝鮮国は山県有朋がシュタイン教授から学んだように日本にとっては「利益線」であって中立国でなければならなかったが、甚大な被害をもたらされた韓国の人々の反日感情が更に高揚し、親ロシア派の閔妃が再び権力を持ち始めていた。井上馨駐在公使が閔妃を訪れ日本側への傾倒を交渉するも応じられず、対ロシアに対する日本の警戒感が強まった。日本側の駐在公使が井上馨から三浦梧楼に代わった。

(2)閔妃暗殺事件

下関講和条約の実質的な効力は台湾平定の1895年11月18日となるが、その前に事件は起こされた。10月8日午前3時、三浦梧楼は領事館警察官、日本軍守備隊、雇った大陸浪人等を王宮へ突入させ、閔妃を殺害させた。三浦梧楼は死体を確認して焼き払った。実行犯が誰かをめぐり諸説があるが謎の多い事件である。

参考文献は「閔妃暗殺」角田房子著 新潮文庫1988年。

(3)1896年1月反日武装闘争が起きる・露館播遷

日本は当然のこととして国際的な批判を受け、三浦梧楼を裁判にかけたが証拠不十分で無罪となって、晩年は枢密院顧問にまで就任している。個人犯罪か組織犯罪か今も不明の事件でウキペディアでも取り扱い注意とされている。

然し事件があったことは確かで、朝鮮の全弘集内閣が日本の圧力を受けて、事件の解明をしなかったことにたいして民衆の反日感情が更に強まり「国母復讐」を掲げて最初の反日武装闘争が起きた。2月全弘集内閣を倒して、高宗はロシア公使館に移され親露派の政権を樹立した（露館播遷）

日本はこの途方もない蛮行で朝鮮国への影響力を失い、国際的にも野蛮な国とのイメージを与えてしまった。

1897年10月朝鮮は国号を「大韓帝国」に改め、清国から独立した。

私見

政治と外交の世界はミステリーです。この事件を巡り多くの運動があるようですがエビデンスは隠されているか焼却されているかで真実は分からないでしょう。

犯人も日本人説、朝鮮人説とあり、朝鮮のなんらかの事情で公にされるまでに時間を要していますし、三浦梧楼を朝鮮駐在公使に推薦したのが井上馨で、決定したのは伊藤博文と山県有朋で長州藩で一貫されていることも不思議な人事です。追求タブーの事件の一つなのでしょう。

いずれにしても日露戦争への道筋はつきました。戦場は又もや韓国です。

私は本当に韓国の方が気の毒でたまりません。

歴史を語るに主観離れ難しです。主観から全く自由になって歴史を語ることはできません。本稿の私見以外の文章も例外ではありません。高校の「日本史B」の水準は保って進めます。独学ですので解釈の誤りがありますので、是非とも指摘をお願い致します。

本文で省略した部分はトップページに戻り左側の粗稿欄を参照ください。